

カンボジアにおける 小規模の教育協力活動 (2011 - 12年) の事例 —現地におけるスチール黒板の組み立て、 および教員研修会の実施—

大 隅 紀 和

(甲子園大学特任教授 京都教育大学名誉教授)

はじめに

本稿で小規模としているのは、①協力活動の取り組む期間が開始から約1年、②関わる人材が1、2名から数名、③財源がせいぜい十万円程度であること、などを指している。いわばマイクロ・スケールで、現地のピン・ポイントでの協力活動である。

それでも途上国の教育協力について、具体的で現実的な検討の材料になると考える。なぜなら途上国の教育協力は、さまざまなレベルがあり規模も異なる。現地で混乱を生じないように、それぞれが効果を発揮することが望まれる。それには個々の取り組み事例を知らせあい、その協力活動の視点を検討しあう必要があると考える。

本稿の主要な部分は、日本製のスチール黒板シートを持ち込み、現地でアッセンブルして供給し、教育・学習活動の改善に役立つことを目指しているもので、筆者にとってはスリ・ランカ(2003～06年)、タイ(2007～09)での取り組みに続くものである。スリ・ランカではJICA専門家として、タイでは同・シニア海外ボランティアSVとしての取り組みだった。本稿では、組織を背景にしない個人レベルの活動となったものである。

日本のスチール黒板シートを購送して、現地でアッセンブルする。そのスチール黒板(ハード)を使って、教師向け研修会(ソフト)を実施する事例は、すでに筆者がスリ・

ランカやタイで何度か経験してきたものだが、この取り組みは機材の提供と研修プログラムの実施と組み合わせている点で独自性があると考えている。

本稿は2011年2月から約1年の経過を経て、①カンボジア、シェムリアップでのスチール黒板の現地アッセンブル作業、②シェムリアップ近郊のバンテアイ・スレイ郡の教師向けワークショップの実施、③その機会に現地調査などに取り組んだ報告である。

この種の活動には、多かれ少なかれ個人的な事情が背景になる。本稿でも、少し私事にわたる記述があることを断っておきたい。

1. マイクロ・スケール、ピン・ポイント協力の目的

これまで注目を集めてきているのは、なんらかの組織を基盤にする大規模な協力活動である。それに加えて多くのNPOやNGOが基礎教育分野への協力を参画するようになって、多彩な活動になっている。そして任意のボランティア団体や個人レベルの活動が加わる事態になっている。

これまで教育協力の研究は、規模の大きな組織や大学研究機関を基盤にする活動が主要な対象とされてきた。NPOやボランティア団体、まして個人レベルの取り組みは事例報告さえ少ないように思える。しかし時代経過とともに規模の大きな協力が少なく

なり、後者が活発になる傾向がある。

活発になってきているマイクロ・スケールの地域を限定するピン・ポイントの協力活動は、もともと草の根協力であり、かつ現場主義の協力である。また合い言葉の一つである「足の早い、目に見える協力」を実現する。

そして規模の大小に関わらず、それぞれに教育協力を考える視点がある。

2. 現地側のカウンター・パートの存在

協力活動には人、物、財源の3要素が必要になる。このうち、決め手は「人」である。活動現場にいる人、その人とつながる人たちが物を動かし、財源を獲得して具体的な活動が展開される。規模の大小はあっても、これが基本になる。

マイクロ・スケールの個人レベルの協力活動には、現地側にいる「人」とのコンタクトがなくては実現しない。本事例の場合は、カンボジアのシェムリアップに二度目となる JICA シニア海外ボランティア SV の伊藤明子さんである。⁽¹⁾

シェムリアップ教育局に赴任されている伊藤明子さんは、中学校の理科教師として横浜で10年、東京で20年を経て、2006年から2年間、同・教育局に JICA シニア海外ボランティア (SV) としての活動を経験されている。

いったん帰国の後2010年9月から2年間、ふたたび同・教育局に赴任されている。前回は「教育行政」、今回は「教育政策」と担当の指導科目の名前は変わったものの、教育局局長のもとで視学官たちへのアドバイス活動に取り組まれている。

現実にはSVとしての業務だけに限らない。韓国 KOICA はじめ、スエーデン SIDA、ノルウェーのセイブ・ザ・チルドレン・インターナショナル、その他さまざまな援助

組織や団体が赴任先に折衝してくる。それらの教育協力活動のコーディネータのような立場にある。同じような事態は、筆者がインドネシア高等教育総局 (1991～91年)、スリ・ランカ国立教育研究所 (2003～06年) に JICA 専門家として赴任して経験したことと相通じる。

よく知られるように1990年タイのジョムティエンでの国際会議で「万人のための教育を」(EFA : Education For All) が打ち出され、2000年にセネガルのダカールで2015年までに国連ミレニアム開発目標 (MDGs) の達成が謳われている。そのため教育協力の世界的潮流は、それまでの高等教育への協力から初中等・基礎教育分野に大きく舵が変わってきた。

カンボジアのシェムリアップの限られた地域に限定してみても、政府開発援助も NGO、NPO、各種ボランティア団体が、さまざまな形で初中等教育・基礎教育に参画するようになってきている。

このような経過を背景にしながら、教育協力の現場では一人の教育者として目の前の事態に主体的に何ができるか、自分の力量と限られた経費でできることは何か、すぐに取り組みなくてはならないことは何か、などという差し迫った課題を突きつけられる。まさにマイクロ・レベルのピン・ポイントの活動課題である。

3. 筆者との関わり－2010年2月シェムリアップ滞在前後のこと

筆者にとって、1995年に首都プノンペンでユネスコ支援による「算数・理科教科書作成教員研修会」でリソース・パーソンを勤めたことがある以外は、カンボジアに行く機会はなかった。特に日本国内に落ち着くようになった2009年以降は、居住地の泉佐野市を中心に地域の子どもたち向け科学教室などを実施していた。

たまたま、その科学教室の参加者の母親から知人だというモーガン三恵子さんご夫妻と娘のレックスマイ、愛称リキちゃん（以下「リキちゃん」と記す）がシェムリアップに長く居住していることを知らされた。

一方、タイ国教育省・科学技術教育振興研究所（IPST）には、長年の交流経過があるだけに年に一、二回は出かける機会がある。2011年1月には北部チェンラーイ地域総合大学（ラチャパット・チェンラーイ）で開催されたタイ国の理数科教師大会（タイ語で「ウォ・ター・ロー」と称している）に講演依頼があつて出かけた。その機会にバンコクから航空便で一時間のシェムリアップを訪問したのだった。

シェムリアップは、世界遺産のアンコール・ワット遺跡があることで知られる。ここには日本人の方たちが、約二百人在住していて観光関連はじめさまざまな仕事に携わっている。その子息で、幼稚園から中学校就学段階の子どもたち十名前後がいる。

たいていは地元の学校、またはインターナショナル・スクールに通学している。

おもに日本語を学ぶために、日曜日に補習授業校を開設して学んでいるという事情がある。前記の母親の知人のお子さんリキちゃんも、小学校3年生に相当する学年で、この補習校に通っている。

現地の関係者たちは、大使館にも働きかけて正規の日本人学校にしたい強い希望を持っている。その補習校では、理科実験を経験する機会が少ないので、筆者の滞在中に身近なものでできる理科実験を要請されたのだった。

この一回目の滞在では、前記モーガン三恵子さんの案内で、アンコール・ワット遺跡後方の「ノコール・クラウ（Nokor Krau）小学校を見学した。シェムリアップ市内では、北海道出身の田中千里さんが活躍していることで知られる大規模校のワット・ポー小学校も訪問したのだった。



写真 1

シェムリアップの日本人補習授業校の理科実験に参加した子どもたちと、その父母のみなさん。

笠原知子さんが主宰する「小さな美術教室」で（2011年2月）

4. 2012年2月の再訪まで

2011年3月に帰国した後も、カンボジアとの交流は続いた。

6月中旬から7月下旬の間、前記のモーガン三恵子さんとリキちゃんが、わが家に滞在していた。シェムリアップのインターナショナル・スクールが夏休みに入って、その間リキちゃんを泉佐野市立上之郷小学校の3年生に体験通学させるためだった。

こうしてカンボジアに居住して十数年という現地に明るいモーガン三恵子さんと、教育事情を話し合う時間を持つことができた。

筆者が、ラオスやカンボジアに対して多少ともスチール黒板を供給したいと考えていること。そのため、すでに（株）青井黒板製作所の協力を得て十数セットを手元に保管中で、輸送経費の点で困難に直面していることを話した。それが彼女から前記JICA・SVの伊藤明子さんに伝わることになった。

JICA・SVの伊藤明子さんは、JICAが募集している「世界の笑顔」プログラムで保管中のスチール黒板の輸送を申請し、また日本からの購送機材の申請もしたが、残念ながら不採択となった。これらの経過は、もっぱら電子メールによるやり取りだった。

5. スチール黒板用シートの輸送と現地でのアッセンブル

そこで、伊藤明子さんの奮闘が続く。

縦90cm、横180cm、表面に5cm間隔の暗線入り、グレー色の黒板シートの何枚かを日本から取り寄せて、シェムリアップでアッセンブルしてみたい、というのである。筆者が、以前にスリ・ランカとタイで経験したことである。

まずは、ごく小規模に試みるのが前提になる。

2011年12月の年末から新年にかけて、彼女の前任者である富永典子さん（広島市在住）がシェムリアップに来訪される。その機会に、ともかく円筒形に梱包した黒板シート1枚を日本から運ぶことが試みられた。同氏は、福岡空港発してバンコク着。この便では超過料金（エクセス・チャージ）が、1万2千円の出費だったという。バンコクからは、なんと陸路でシェムリアップに届けられた。

その一方で2011年の年末から、伊藤明子さんは（株）青井黒板製作所とのやりとりを経て、5枚分を購入し直径50cmほどの円筒状に梱包して、12月末に神戸港から船便で輸送された。5枚分なら30キロの重量制限に収まり、郵送経費が節約できる。この梱包はシェムリアップ郵便局止めで1月下旬に到着。

彼女からの事前連絡で、送り手の青井黒板側が伊藤明子さんのケイタイ番号を明記していて現地郵便局から到着通知があって、無事に引き取ることができた。郵便局で約8ドルの引き取り料を支払ったという。

こうして前記の富永さんが運んだスチール黒板シートとあわせて、計6枚がシェムリアップに到着した。到着した黒板シートを現地でアッセンブルするには、ベニヤ板などの木材、接着剤、組み立て作業経費が必要になる。スタンド無しで、机の上などに乗せて使うタイプである。今回の取り組みでは、結局のところ一台のスチール黒板の製作は、合計で約1万2千円となる。その詳細は、末尾に記すとおりである。

このとき、筆者はバンコクでの前半部分となる滞在を終えて、2月2日にシェムリアップ着。翌3日には、伊藤明子先生の案内で、試作中の家具屋に仕上がり状況をドキドキしながら見に行った。

なにしろ、その4日後の2月7日には、バンテアイ・スレイ郡教員研修会で、これらの黒板を使う計画なのである。

6. スチール黒板の現地アッセンブル

シェムリアップの宿泊先から車で約15分。やや郊外の感じがするところに家具屋があった。となりには木材や塗料などを扱う荒物店などが並んでいる。伊藤明子先生が、かなり時間をかけてスチール黒板をアッセンブルできるところを探索して、ここに行き着いたという。筆者は以前スリ・ランカで、輸出向けの木の玩具を製作する工場で取り組んだことを思い出したものである。

日本から空輸した黒板用シートは、梱包料を出したにもかかわらず、運搬途中で変形して、凹みが生じている。それを平らに修復して、試作した一枚を見せてくれる。家具屋だけあって、スチール・シートは厚さ9ミリのベニヤ板に接着して木製の枠組みに納まっている。製作したてであるせいか、まだ反りも生じていない。

重さは、大人二人で運べる程度となっている。表面の保護ビニルが一部で剥がれかけているが、注意が行き届かなかったものと思われる。通常は、はじめて使用するまで保護ビニルは剥がさないものである。

なにしろ家具屋にすれば、まったくはじめての仕事なのだから、多少は大目に見てやるしかない。

しかし、これで畳み一畳分の大きさなが

ら、そして適当な机の上に立てかけて使うものながら、日本の先生たちが毎日使っている黒板と同じ品質の黒板となった。日本製の黒板用スチール・シートを使ってシェムリアップで組み立てた第1号である。もっとも伊藤明子先生の話では、韓国製のスチール黒板が援助機関のKOICAなどがカンボジアでも、またラオスでもかなり広く供給されはじめているということだった。

7. バンテアイ・スレイ郡教員研修会の実施

スチール黒板の試作品（ハード）を提供するとともに、どのように効果的な授業ができるか現地の教師向け研修活動（ソフト）が必要になる。今回のシェムリアップ滞在では、バンテアイ・スレイ郡教育局に赴任されている前記JICA - SVの伊藤明子先生が、研修会の計画と実施に取り組まれた。ごく小規模ながら、一つの典型的な事例となった。

(1) 会場校と参加者

2012年2月7日火曜日。この日は祝日。教師たちが参加しやすいという理由で、この日になった。会場校は、アンコール・ワット遺跡のシェムリアップから北東に約40km、車で1時間のバンテアイ・スレイ遺跡



写真2

カンボジア、シェムリアップ。
アッセンブル作業をした家具屋で。
左、JICA - SV 伊藤明子さん。
中央は家具屋の職人。右、筆者。
職人と筆者の間に、試作したスチール黒板
が横になっている。
(2012年2月3日)

にごく近いところだった。この遺跡見学をする観光客が通る道路近くにある。会場は、通常の教室。電気はない。したがって天井扇もない。

校舎の屋根はトタン葺き。レンガ作りにモルタル塗りの構造になっている。暗闇の教室に入ってブリキ板の遮光窓を開けると、わずかに微風が入り、屋外の強烈な照り返しがあって、教室内はわずかに薄明るくなる。黒板は、韓国製と言われる薄い暗線がはいったスチール黒板。チョークで書いてみると、上滑りしてチョークが乗らず、とても書きづらいものだった。

教室を見渡すと、授業が終わったばかりという状態だった。机は以前にスイスの援助機関が供与したという金属製の二人掛け。椅子は台座がはずれてしまっているのが半分くらい。床面も机も、ほこりだらけで十分な掃除をしていない。さもなくともパウダー状のこまかな砂ぼこりが舞い散るだけに、算数や理科の学習の前に、清潔さを保つクリンリネスの訓練が必要だと思われた。

このような校舎や教室の様子は、アジア諸国、特にネパール、スリ・ランカ、タイの地方、ラオスなど数多くの学校で見えてき



写真 3

研修会の参加者（会場となったバンテアイ・スレイ校の教室前で）二列目、右から5人目、伊藤明子さん。その右に通訳をしてくれたサンボ校長。その右に教育局ケメラ視学官、参加者男性一人おいて右端は、筆者。

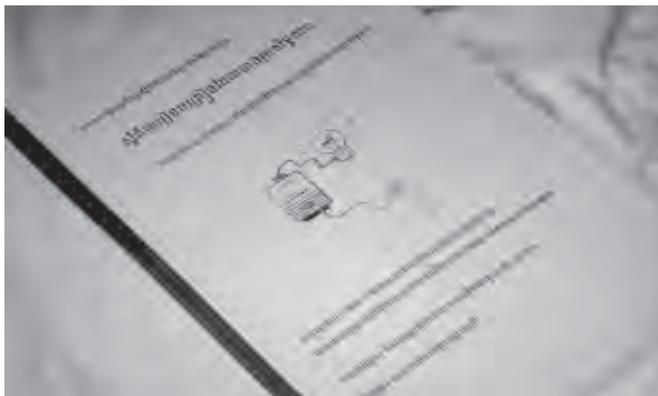


写真 4

研修会で配布されたテキスト

ただけに驚きはしなかったが、カンボジアのバンテアイ・スレイ郡でも同じような状況だった。

ピックアップ・トラックで運んだ6台のスチール黒板を教室の両側に配置し、机をグループ活動に適したようにレイアウト作業をすると、はやくも汗がしたたり落ちる。

研修の開催時間は7時30分から11時30分。ペットボトルの飲み水とスナックを用意した休憩を含めて4時間プログラムが計画された。

参加者は、バンテアイ・スレイ郡の小学校のうち28校から、各学校で原則として5年生担当の教師1名の参加を教育局長名で周知された。祝日のこともあって、数名の欠席者があった。結局、男性が6名、女性が17名、合計23名の参加者となった。

（2）実施プログラム

20数名の小学校教師を対象に、半日研修を実施する。その主要な目的は、スチール黒板を使った算数と理科の効果的な学習指導の工夫を体験することである。

このため用意したのは、①大型ジオボード、②乾電池と豆電球の大型模型、③現地でアッセンブルしたスチール黒板を使う板書練習である。

（3）話題1. ジオボード

ジオボードは、小学校低学年の図形学習

の教具として広く知られている。その実物の多くは、一辺が20～30cmの正方形の板切れを使って、横に5～6本の釘を打ちつける。釘は5～6列に並べて、計25本または36本使う。碁盤の目に配置された釘に輪ゴムを使って図形を作る。これを子どもたちの小グループに配って、正方形、長方形、三角形などを作る、いわば図形遊びをすると、されるものだった。

「子ども中心」の学習が主張され、その潮流の影響から算数学習で盛んに使われる時期があったが、実際には数枚のジオボードでも、準備作業が手間取ること、後始末には重たくて、しかも釘でケガをしやすい。そのため多くの教師に嫌われたものである。

それを筆者は、ずっと楽な方式に改良した。まず一辺40～50cmの大型ジオボードをスチール黒板にディスプレイして、子どもたちには、そのパタンをプリントしたワークシートを配布することとしている。これで準備や後始末は楽にできる。

（4）話題2. 乾電池と豆電球の大型模型

乾電池と豆電球を使う実験は、小学校段階で最もポピュラーなものになっている。しかし、これには多くの乾電池を消耗させてしまい、省エネルギーや環境保全の観点からも、勧められない。そこで、筆者は大



写真5 研修会の様子

右側の大きな黒板は、韓国製のもの。左が、現地でアッセンブルしたスチール黒板。参加者が、乾電池と豆電球の大型模型を使って演示実験しているところ。
(撮影、伊藤明子)

型の模型を使って演示実験する方法を勧めてきた。写真5は、その様子を示している。

(5) 話題3. スチール黒板の板書体験

多くの小学校教師が、十分な板書練習をしないで教えている。そのうえ、黒板とは名ばかり、書きづらく消しにくい。活発な授業をする障害となっている。そこで現地でアッセンブルしたスチール黒板を提供する試みを続けているのだが、完成品を渡すだけでは不十分なので、参加の先生たちに改めて板書練習を体験してもらうことにしている。

あわせて、しっかり絞った雑巾で表面をぬぐってメンテナンスする必要なことも教えることにしている。ついでながら、現地で使っているチョークと布切れを黒板消しに使っている。

8. 研修会の終了後—スチール黒板を配布した小学校訪問

現地でアッセンブルしたスチール黒板は、会場校のバンテアイ・スレイ校に贈呈するほか、3つの小学校に配布する計画だった。そのため研修会の終了後ピック・アップ・バンに積み込んで、ただちに出かけた。

(1) オムナー校

参加者の女性の先生がバイクで未舗装の

道を案内する。そのあとを追いかける。元首相のフンセン氏の奥さんが校舎を寄贈したという学校である。この学校も電気、トイレなしだった。

(2) カンプロム校

首都プノンペンとシェムリアップを結ぶ幹線道路がある。土地では高速道路と呼ばれている道路のかたわらの学校だった。日本人の篤志家が校舎建設をして寄贈したという。参加予定だった女の先生は、バイクが用意できないために参加できなかったという。彼女は、研修会で通訳をしてくれたサンボ先生と教員養成校の同級生で知り合いだったためケイタイで呼び出して、学校の門と教室の鍵をあけてもらって黒板を運び入れた。

(3) タベン校

通訳をしてくれたサンボ先生が校長をしている学校で、スイスの援助機関が建設した学校だという。太陽パネルで一部に電気の供給があるもの、実際は不十分。不完全ながら、給食は国連食料援助で行われている。

校舎の背後に体育館をつくる計画が進んでいる。その向こうのかなりとおくに教員宿舎が見えるが、電気があるようには見えなかった。陽が落ちると石油ランプの灯火を使うのだという。



写真6

黒板を配布したオムナー校。

研修会に参加した女性の先生が田舎道をバイクで道案内してくれた。

床に置いているのが配布したスチール黒板。

この学校には、猛烈な凸凹だらけの長く続く悪路を行く。筆者はアフリカのケニヤ、バングラディシュ、それにタイとミャンマー国境の山岳地帯などでも経験していることながら、極めて過酷な道である。シェムリアップから、バイクで片道1時間半。サンボ先生は女性ながら、毎週末にはシェムリアップの親元に往復している。

9. シェムリアップ小学校教員養成校

シェムリアップ小学校教員養成校は、市街地からアンコール・ワット遺跡に向かう道路沿いにある。かなり頻繁に各国からの援助を受けている様子が、校門近くの看板にも示されていた。日本も新しい理科室(サイエンス・ルーム)を供与している。

カンボジア全24州のほぼ8割程度に小学校教員養成校が配置されている。これを持たない州は、隣接州の養成校に合流する形をとっている。中学校教員養成校は、5州に開設されていて、シェムリアップ州の教員希望者はバタンバン州にある中学校教員養成校に行くことになる。

10. カンボジアの教育支援組織—公益財団法人 CIESF（シーセフ）

今回の現地調査で見聞したことの一つに、公益財団法人 CIESF（シーセフ）がある。筆者は伊藤明子氏への聞き取りから、カンボジアの教育支援に対しては、この組織がユニークな活動をしていることを知ることができた。筆者は、これまで広くアジア地域の教育協力に、いささかの関わりを持ってきたとはいえ、まだカンボジア経験はごく浅い。それだけに思い違いがあることを断ったうえで、カンボジアの教育協力を考えるうえで欠かせない組織だと思うので、この財団のことにふれておきたい。

詳細は同・財団ホームページ (<http://www.ciesf.org>) へのアクセスに譲るが、現地で聴取した限りで簡単に報告しておきたい。CIESF は、カンボジアのための国際教育支援財団 (Cambodia International Education Support Foundation) の頭文字からきている。東京に本部事務所があり、プノンペンにカンボジア事務所がある。この財団は、カンボジアに40年の長きに関わりを持たれ、特命全権大使として高名だった篠原勝弘氏が2009年の外務省退官の機会



写真7

シェムリアップ小学校教員養成校
シェムリアップの市街地中心地、アンコール・ワット遺跡に向かう途中にある。

の前後に設立されたと言われる。

筆者がユニークだと思っているのは、① 2～3名程度と少数ながら、財団が自前で教育アドバイザーとして経験を積んだ日本の先生を現地の小学校教員養成校などに派遣していること。②特に理科と算数教育に重点を置いて、実験器具などの提供に尽くされていること。③ラオスでの協力を目指した現地調査、さらにはミャンマー調査にも乗り出されていることなどで、いずれも極めてユニークな教育協力活動として注目される。

11. 小規模な教育協力活動—その類型

教育協力を大別すると、まず大型の政府開発援助、国際機関が取り組む協力事業がある。NGOやボランティア団体が行う協力活動は中規模な活動とすると、それよりも関わる人材、期間、財源に限られる、ごく小規模な協力活動がある。規模の大きさから大中小とすれば、小規模な取り組みは、数えきれないくらい行われてきているだろうが、これまで十分に省みられることが少なかったように思う。

小規模な取り組み区分ができるなかには、いくつかの類型が見られる。第一は、校舎建設や給水の井戸掘りなどがある。これらは小規模な区分のなかでも、かなりの経費を伴う。第二は、楽器や文房具などの寄贈活動で、第一区分と共通するのは、現地側に事情に通じた受け入れ団体や個人があって、多くはその仲介と支援を得て実施される。

そして、第三は、個人レベルの現地調査研究の類である。日本の大学と関連機関が留学生の受け入れや現地側の教育機関と交流活動をしていて、そのラインで大学院院生が現地調査研究に取り組む。これには国内大学に多数の国際関連学科や研究科が開設されている事情を反映している。

こうして大規模から小規模まで、さまざまな協力活動が一つの国、一つの拠点に入り交じっている。その結果、受け手側の政府機関の全体調整機能に混乱を生じてしまう。あらゆる協力活動は、「良かれ・・・」と思う善意から始まる。しかし、その善意が、必ずしも生かされないことも少なくない。それだけに、小規模な協力活動にも慎重な配慮が前提になるのは言うまでもない。

おわりに

教育協力の原点は、過酷な環境のもとにいる先生たちに、少しでも快適に教えられる条件を用意することである。先生が、教えることが楽しいと感じることができれば、子どもたちも楽しく学ぶことができる。わずかな数のスチール黒板の供給と、半日の研修会が果たして、この課題にどれほど貢献できるのか、頼りないことである。マイクロ・レベルでピン・ポイントの活動の一つとして、ご批判をいただきたいと思う。

日本の学校で先生と子どもたちが毎日使っている黒板と同じものを途上国の貧しい環境の教室にも提供できないだろうか。この思いは、筆者の長年の課題にしてきたことの一つで、すでにスリ・ランカとタイで、それぞれ約250教室分をJICAによる財源で実現してきた経過がある。

本稿は、その関連の一つとして、ごく小規模な個人レベルでの取り組みに挑戦した経過報告である。現地にJICA・SVとして活躍されていた伊藤明子さんの奮闘で実現したもので、やはりJICAの存在が背景になっている。

関係者各位には、何かとお世話になったことを感謝するとともに、本稿は各位の考えを反映したものではないし、文責は筆者にあることを断っておきたい。

参考事項・参考資料

⁽¹⁾ 伊藤明子、JICA - SV 平成 22 年度 2 次隊員。
赴任期間、2010 年 9 月 - 2012 年 9 月。指導科目、
教育政策。赴任先、カンボジア、シェムリアッ
プ州教育・青年・スポーツ局、東京都出身。前
回 2006 年 - 2008 年に、同・赴任先で SV、教
育行政。横浜と東京都で 30 年の理科教師経験
がある。

楠 輝義、2010、シェムリアップの教育、JICA
- SV 19 年度第 4 次隊、学校教育環境改善報告
書、A 4 版、全 60 ページ。伊藤明子氏のご好
意で入手。

スチール黒板の製作経費・一部は概算 表示

1. 1 枚分、富永典子さん関係

シート 1 枚、5 千円。梱包費、3 千円。福
岡空港宛輸送費、4 千円。計 1 万 2 千円。
ただしエクセス・チャージを含まない。

2. 5 枚分、船便輸送

シート 5 枚、2 万 5 千円。梱包費、3 千円。
船便代一式（日本郵便で 30 kg 以内）、1 万円。
インボイス作成費など一式、5 千円。計 4
万 3 千 5 百円。

3. 6 枚の現地アッセンブル費用（米ドル）

ベニヤ板 80 ドル。接着剤 14 ドル。組み
立て作業代 125 ドル。計 219 ドル。約 1 万
6 千円。

4. 総計、7 万 1 千 5 百円。一台あたり、
約 1 万 2 千円。

(以上)